

スイス連邦工科大学ローザンヌ校 留学報告書

2019.2.18~2019.5.31

化学生命工学科 4年 櫻井結衣

1. はじめに

私は工学部の部局間協定を利用して、スイス連邦工科大学ローザンヌ校(École Polytechnique Fédérale de Lausanne, EPFL)に1学期間交換留学をしました。この留学に際しまして、ご支援くださった OICE の皆様や学科の先生、資金面でお世話になりました日本学生支援機構に感謝致します。

2. 留学の動機

大学卒業後以降のキャリアを海外で積む可能性を考え、学部生の中に一度海外の教育環境・研究環境に身を置いてみたいと思い、留学を決意しました。1年間留学するという選択肢もありましたが、卒業時期を遅らせて長期間留学する意義を見出せなかったため、卒論以外の必要単位を取得し終えた3年の冬からの1学期間のみ留学することにしました。

EPFL を留学先にした決め手は、ヨーロッパでトップクラスの大学であり、各地から優秀な学生が集まっていることです。また、ヨーロッパのほぼ中心部に位置し公用語を4つ持つスイスという国自体にも惹かれ、留学先として選びました。

3. 留学準備

OICE のホームページにある書類を一通り揃えました。推薦書は早期配属先の教授にお願いしました。10月半ばの東大の担当者との面接を経て派遣が決定し、EPFL に交換留学をアプライするとすぐに受け入れ許可が出ました。EPFL からの案内のもと寮管理団体 FMEL に登録し、しばらくして大学近くの寮が紹介されてきました。

学業面では、研究室の早期配属制度を利用して山東研究室で3年の夏休みから研究活動を始めました。さらに、早期配属先のテーマと似たプロジェクトができそうな研究室を EPFL で見つけたため、早期配属先の教授を通じてコンタクトを取り、滞在中 project student として受け入れてもらうことになりました。

4. 留学生活

先に述べたとおり、EPFL の Laboratory of Therapeutic Protein and Peptides (LPPT) という研究室で小さなプロジェクトに関わらせてもらいました。これは EPFL Chemistry and Chemical Engineering 専攻の修士学生の必修授業で、修士一年の1学期目に週一・2学期目に週二の Lab emersion を経て修士2年目に1年間一つの研究に取り組むというカリキュラムに基づいています。LPPT では、Peptidic macrocycle に関する小さなプロジェクトを行い、最後はラボメンバー全員の前でのプレゼンと、論文形式のレポートに取り組みました。日本とは異なる研究環境・研究スタイルに触れることができ、今回の留学の最大のハイライトとなりました。

生活面では初めての一人暮らし・フラットシェアを経験しました。ルーマニア人1人・ベルギー人2人と2つのバスルーム・1つのキッチンシェアしていたため、生活スタイルや習慣の違いに苦労することも多々ありましたが、総じて良い経験になったと思います。

EPFLのあるローザンヌはレマン湖畔にあるフランス語圏の街です。フランス語は1年生の第二外国語で勉強しただけで、私は全く話すことも理解することもできませんでしたが、スイス人はほぼ皆英語に堪能で親切なため、日常生活も英語でほぼ問題ありませんでした。EPFLは学部の授業でも2割ほどは英語で教えられており、さらに修士からはすべて英語なので、フランス語が話せなくても十分学べる環境にあると思います(留学生は学部生であっても修士の授業が履修可能)。ただ、フランス語で会話をしている現地の学部生の輪に英語で入っていくことは難しいので、フランス語が少しでもできると交友関係の輪が広がって楽しいかもしれません。私も初めはなかなか友達作りに苦労しましたが、ESNという団体が開催している留学生向けのイベントに参加する中で少しずつ知り合いを増やしていきました。

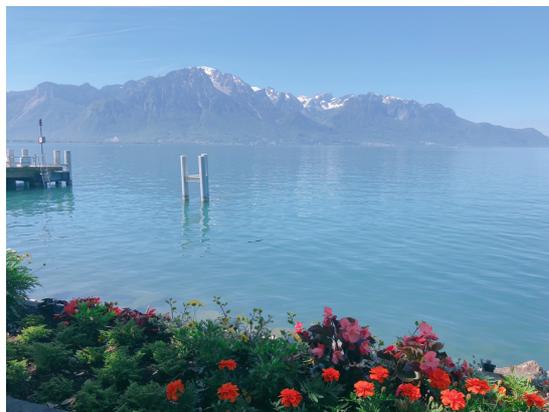


Fig. 1 レマン湖の眺め

5. 帰国に際して

早期配属先とは異なる研究室に配属することにしたので、卒論研究に備えて予定を早めて帰国しました。卒業後は同専攻の修士課程に進学する予定です。

6. 終わりに

スイスではどこへ行っても私が一番話すのが遅い上に下手でした。スピーキングが苦手な人が多い日本人の中では英語が話せる方だと自負していましたが、同じように英語が母語でない学生が多い中、皆当たり前に専門的な内容を英語で議論する中になかなか入っていき、悔しい思いをすることが多かったです。現状に慢心せず自分の英語力をさらに磨いていく必要があることを痛感させられました。

週末はスイス国内や他の国へ足を伸ばしましたが、ヨーロッパ全体として環境問題に対する意識の高さを感じました。お店でビニール袋をもらうことはほとんどありませんでしたし、大学のフードトラックでも再利用可能な容器が使われていました。また、スイスを含めヨーロッパの多くの国では日曜日はほとんどのお店が閉まっていたこと、ラボメンバーが皆 18:00 頃には帰宅し休日もしっかり休んでいる姿も印象的でした。お店が開いていないのは初めのうちはとても不便に感じましたが、慣れてみるとむしろ日本が働きすぎなのではないかと思うようになりました。

日本の慣れ親しんだ環境から離れて生活してみると、今まであまり気づいてこなかった日本人としてのアイデンティティを強く感じましたし、嫌なことがあるたびに「日本だったらどうだろう」「日本人だったらどうだろう」と考えざるを得ませんでした。留学中に抱いたたくさんの劣等感や焦燥感、文化の違いに対する戸惑いは、今後日本人として自分は何ができるのかを考えるきっかけとなりました。この感覚を忘れず、これからの自分の成長につなげていきたいと思えます。



Fig. 2 ESNを通じて仲良くなった交換留学生の友達と